

静岡文化芸術大学

第10回多文化子ども教育フォーラム

ブラジルと日本の 学校文化の比較

報告書

日時：2015 年 7 月 4 日 （土）

場所：静岡文化芸術大学 南 280 中講義室

主催：静岡文化芸術大学

編集

池上重弘、イシカワ エウニセ アケミ、上田ナンシー直美

2016 年 3 月

このフォーラムは、2015 年度静岡文化芸術大学特別研究（研究代表：池上重弘）
「多文化共生の地域課題への取り組みをめぐる総括的研究」の事業の一環として行われました。

第10回多文化子ども教育フォーラム ブラジルと日本の学校文化の比較

目次

第一部 報告	・・・	1
趣旨説明 池上重弘（静岡文化芸術大学教授）	・・・	1
報告1 坂柳言衣（豊橋市立南陽中学校教諭）	・・・	3
○自己紹介		
○ブラジルで勤務した「めぐみ学園」		
○めぐみ学園での三つの活動		
○ブラジルに住む日系人の子どもの特徴		
報告2 安藤クリスティーナ（ブラジル人保護者・EAS ブラジル人学校教頭）	・・・	7
○自己紹介		
○子どもたちの学校と先生との出会い		
○ブラジル人としてのアイデンティティとポルトガル語		
○子どもたちはブラジルへ		
報告3 カルドーゾ カロル 多美（ブラジル人保護者）	・・・	10
○自己紹介		
○多様性の国、ブラジル		
○日本とブラジルの教育制度の違い		
○文化の違いから生じたトラブル		
○日本の学校の長所と短所		
○ブラジルの学校の長所と短所		
○家庭内での日本語教育		
第二部 質疑応答	・・・	14
資料		
写真	・・・	22
アンケート	・・・	27
チラシ	・・・	32

第10回多文化子ども教育フォーラム (2015年7月4日開催)

第1部 報告

池上

○開会あいさつ

皆さま、こんにちは。今日は第10回多文化子ども教育フォーラムにお越しいただき、ありがとうございます。2012年度にはじまったこの多文化子ども教育フォーラム、今回で3年目なのですが、おかげさまで第10回を迎えることができました。今回はブラジルと日本の学校文化の比較ということで、カリキュラムがどうなっているのかとか、教えている内容がどうかとかいう詳細の話よりも、学校文化がどんなものなのかという点について三者三様の見方でご報告いただいて、後半は皆さんとディスカッションしたいという、そういう趣旨の会です。

プログラムの最初の報告者をご紹介します。坂柳言依さんです。坂柳先生は現在豊橋市の中学校の先生をされています。JICAの制度によってブラジルの学校に2年間行っていて、日本の学校をよく知りつつ、ブラジルの学校でも教える側としてのご経験をお持ちであると、そういう先生の立場で両方の学校文化を紹介します。どうぞ、よろしくお願いします。

次は安藤クリスティーナさんです。安藤さんはEASブラジル人学校の浜松校で教えていらっしゃいます。また、子どもさんを日本の学校に通わせて、今お子さんはブラジルの大学を卒業し、ブラジルで働いています。日本の公立学校に通ったあとそういう道に進まれたお子さんを持つ母親ということであります。よろしくお願いします。

三人目はカルドゾ・カロール・多美さんです。多美さんは子どもさんが日本の小中学校を経験し、一時期ブラジルに帰国したのですが、その後家族で日本に戻りました。ご長男は日本の学校を卒業して、現在は日本の大学に進学しています。こちらに立っているのがご長男で、本学の2年生です。詳細はまた後ほど伺いたいと思います。よろしくお願いします。

じつは本日の意見交換の司会・進行は本学の伊シカワ・エウニセ・アケミが担当する予定でした。ところがここ数日風邪で声が出ないということで、急きょ、私、池上重弘が本日の司会・進行を務めることになりました。どんなふうな会なのか、企画は全部彼女に任せたので、私の頭の中に構想はないんですが、今日は三人のプレゼンターが非常に面白い話を聞かせてくれると思いますので、その話を伺っていきましょう。それから後半は皆さんの中でちょっとグループ・ディスカッションをしていただいて、その内容を踏まえてフロアとの質疑応答をしていきたいと思っております。

○配布資料の紹介

今日皆さんの手元に配っている資料について少し話をさせてください。まずはお手元の質問用紙については、三人のお話を聞いたところで、「これを聞いてみたいな」ということを書いてくださると嬉しいです。しかし、休憩時間に集めてこれをさばいて答えてもらうのはちょっと難しいので、実際には休憩時間の後、10分か15分くらいグループでいろいろ話をさせていただいて、皆さんからご意見を聞いていきたいと思います。

もう一つ白いA4サイズの紙はアンケートです。ご記入いただいて最後、出口のところで担当が回収しますので、ぜひご記入をよろしくお願いします。

次にピンク色の冊子です。「ブラジル人カウンセラーによる子どもと保護者の心理分析」ということで、これは昨年(2014年)12月に行われました第9回フォーラムの記録です。昨年12月の

フォーラムではブラジル人のカウンセラー、ジュリアナ・バッホスさんが日本で3ヶ月間いろいろカウンセリングしてくださったその成果を報告いただきました。基本はポルトガル語でやったんですけども、日本語も通訳を付けたので、その内容がポルトガル語と日本語の両方で記されています。資料も両言語で入っていますので、これもぜひご覧ください。とりわけ、今問題となっている発達障害をめぐる非常に深い洞察に富んだ議論をお読みいただけます。

カラーのこの青い色調のもの、こちらはまだ先ですけども、10月17日（土）午後本学で行う学術シンポジウム「浜松で考える多文化共生のフロンティア」のチラシです。2015年の今年は、1990年の改正入管法から25年経ちました。一世代に相当する時間です。実はこの会場にも日本の高校を卒業して本学で学ぶ定住外国人の学生が少なくとも4名座っています。そういう時代になってきました。25年経って一世代が変わるなかで浜松ではどんなことが起きているのだろうか、ということを考えたいと思います。基調講演の駒井洋先生は皆さんも書かれたものを多々読んでいらっしゃるかと思います。この分野の第一人者であります。筑波大学名誉教授で、この6月から移民政策学会の新しい会長に就かれました。駒井先生に25年、あるいはもう少し長いスパンで日本の多文化共生を振り返っていただきたいと思います。

報告者の1人目は山脇啓造先生、明治大学教授です。皆さんもご存じかと思いますけれども、総務省の多文化共生プラン、あの会の座長を務めた方です。一方、彼は昨年度1年間ヨーロッパに研究に行っていました。浜松のこともよく知っているという立場でヨーロッパの最先端の移民の統合政策を踏まえたうえで、今の浜松の状況をどのように評価できるのかという話を伺います。2人目の土井佳彦さんは名古屋ベースの中間支援NPOの代表ですけども、かなり手広く、全国で活動しています。3.11、東日本大震災の時の多言語対応では陣頭指揮をとっていました。また、彼は本学の日本語教員養成課程でも講義を担当してくれていて、日本語教育の分野でも非常に深い知識を持っています。浜松のこと、本学のこともよく知っているということで、彼の話をお伺いします。

次は本学のイシカワ・エウニセが「在日ブラジル人の25年間の歩み」ということで第二世代の現状と課題に関して報告します。そして4人目の報告者は高畑幸さん。静岡県立大学の准教授です。フィリピンの人たちの話をしてくれます。静岡県内でも今フィリピン人が随分増えてきています。そういう状況を踏まえてお話を伺います。10月17日、まだ先ですけども、ぜひお集まりいただければと思います。場所はこの教室を予定しています。

○新刊の本の紹介

もう一つ、最近出たばかりの本を一冊紹介したいと思います。『外国人児童生徒の学びを創る授業実践』という本で、『ことばと教科の力』を育む浜松の取り組み」というサブタイトルがついています。東京学芸大の斎藤ひろみ先生、早稲田の池上摩希子先生、そして浜松の瑞穂小学校などで教諭を務め、その後大阪大学大学院での研究を経て、今はアメリカに研究に行っている近田由紀子先生。このお三方が研究と現場を踏まえて浜松の取り組みを理論と実践の両面から紹介しています。この本の第3部では浜松のいろんなエージェントというか、アクターというか、団体が紹介されていて、私たちのフォーラムの準備会のメンバーになっている団体もここで紹介されています。私も最後のパートで紹介されていて、この多文化子ども教育フォーラムのこともこの本で述べられています。私自身は全くこの本に関与していませんけど、出たばかりの本で浜松の全貌をとらえる非常に貴重な一冊です。ぜひ皆さん、ご購入いただければと思います。

○報告の進め方

さて、それでは、これから三人の報告者の方に20分ずつお話をいただきます。この20分はノ

ンストップで、また途中質問は挟みません。質問事項等は後のディスカッションのところでお願いしたいと思います。これから 1 時間お話しただいて、休憩をとって、午後 2 時から午後 4 時 30 分まで、最初はちょっと皆さんにグループ・ディスカッションをしていただいて、その後、1 時間強の質疑応答をやっていききたいと思います。今日はこの会場に学生も多々おります。多文化共生論で授業をとっている学生や外国人児童生徒に学習支援をしている学生もいます。また遠いところでは岐阜県から来ていらっしゃる方もいます。神奈川県からも来てくれているんですね、ありがとうございます。それでは最初の報告者をご紹介します。坂柳言依さんです。

坂柳

○自己紹介

改めまして、こんにちは。坂柳言依と言います。先ほどの紹介にもあったように、2013 年から約 2 年間ブラジルで JICA のボランティアとして活動していました。今年の 3 月末に帰ってきて、まだ 3 カ月というところです。ブラジルにいた間に、偶然にもここにいるエウニセ先生と知り合うことができ、今日ここに立っているといえます。ちょうど 2013 年の 7 月 1 日からブラジルに渡ったんですけど、その 1 週間前にこの場で第 5 回のフォーラムが行われて、ブラジルに行く前にちょっと勉強しようと思って、私も参加させていただきました。ここに参加することができて、とても嬉しく思います。

私の自己紹介をさせてもらって、生まれも育ちも愛知県豊橋市です。そこで 2007 年から豊橋市の小学校の教員として勤務してきました。最初は小学校だったのです。その小学校は豊橋市でも当時一、二位を争うくらい外国人児童の多い学校で、一番多い時は全校生徒 800 人中、150 人が外国籍の子でした。その学校で最初は学級担任をやったり、後半は国際学級の担当をして、直接親と関わることがあったんですが、いろいろ問題を抱える子どもたちや保護者の方と関わらううちにもっとその彼らの背景を知りたい、もっと理解してあげたい、もっとポルトガル語がわかったらなとか、いろいろ考えて、JICA ボランティアとしてブラジルに行きたいと、応募することになりました。

そこで 2 年間ブラジルに行きまして、今年（2015 年）3 月に帰ってきて、今は豊橋の中学校で勤務しています。その学校も外国籍の子が多いところで、今は全校約 505 人中、外国籍の子が 50 人くらい。前の小学校は外国籍の子が 150 人いたなかで、約 9 割はブラジル人の子でした。今の中学校は 50 人いるうち、ブラジルやペルーといった南米系の子はやはり多いんですけども、後はフィリピンとか、中国、韓国、台湾とかインドネシアなどアジア系もいますし、それからスロバキアとかロシアとかのヨーロッパ系の子もいて、本当に多国籍化しているなというのを感じます。今は中学 3 年の担任をしながら国際教室の方で日本語教育の担当もしているので、外国籍の子たちの進路のこと、これからどういう進学をしていくのか、そういうことに興味を持っていますので、後の 2 人のお話をとても楽しみにしております。

○ブラジルで勤務した「めぐみ学園」

今日は日本とブラジルにおける日系人の子どもの教育比較ということですが、私が 2 年間ブラジルにいた間に活動してきたこと、そこからいろいろ考えたことなどを中心に話させていただきたいと思います。

まず私がその 2 年間活動していた街、エウニセ先生の故郷である、パラナ州ロンドリーナという街を紹介したいと思います。パラナ州のロンドリーナ市というのはブラジルの南部にありまして、サンパウロから西へ約 550 キロ行ったところです。時間にすると、長距離バスで 7 時間くらい、夜中に出て、一晩寝れば朝つくという感じです。飛行機なら 1 時間くらいで行けます。人口

は約 54 万人のうち、日系人が約 2 万人いると言われていて、とても日系人の多い街です。皆さんから見た左下の写真のように日本っぽい、日本移民を記念して造られた公園などもあります。

私が 2 年間所属していた学校はめぐみ学園と言って創立 55 年になります。日本人の、日本から移民してきた夫婦が創立されて、今は二代目の娘さんが校長としてやっています。小学校 1 年生から 5 年生の小学校、それから幼稚園、それからコースといういろいろな習い事の教室からなっています。そのコースの中には日本語教室があったり、英語の教室があったり、マンガを教えていたり、習字、太鼓、フットサル、柔道、リコーダーなどいろいろやっています。基本的に小学校、幼稚園は午後からの半日授業になるので、午前中の時間や午後の授業の終わった後、午後 6 時、7 時の時間を使ってこのコースの教室をやっています。それはプラスアルファのお金を払って習い事という感じになっています。全校生徒は約 200 人で、教職員は約 40 人います。生徒の方は約 90% が日系人です。先生方も半分くらいは日系人の方で、日本語が話せる方、少しわかる方などいます。あいさつや教室用語は日本語で行われていますが、基本はポルトガル語が母語なので、ポルトガル語で進められています。この動画は教室の最後のあいさつです【動画再生】。聞こえましたか。こういうふうに日本語で挨拶しています。

この学校は私立の学校でして、2015 年、私が帰ってくる直前に教科書を変えまして、タブレット端末をとり入れた授業を実施しています。子どもたちが常にタブレットを持って勉強しているわけではなくて、先生の教科書がタブレットに入っていて、先生がそれを黒板に映し出して、ここに映し出されたものは、子どもたちも本でも見て、同じものを見ながらやるという感じです。でも学校にはひとクラス分くらいはタブレットがあって、それを使って子どもたちが操作することもあるんですけど、基本は先生たちはタブレットを持ちながら授業を行っています。それをやり始めたところです。その様子も映像で見てください【動画再生】。教科書を読んでいるところですね。先生がタブレットを持ちながら授業をやっています。子どもたちは本を見ています。こんな感じです、先生が前に出てきて、説明などをしていきます。

〇めぐみ学園での三つの活動

そこで私が何をやっていたかという、まず一つは日本語学校の方で日本語の授業をやっていた、二つ目は、日本では小学校の教員だったので、その経験を活かして、小学校でやっていた、またあとで詳しく内容を説明します。それから、幼稚園の方でもお手伝いしたり、学校の外、他の日本語学校へ行ったりとか、そういうこともしていましたし、あとは、日本での勤務校との交流や日本の人たちとの交流もしました。

一つ目、日本語学校の活動を詳しく説明していきますと、こういうふうに授業をやったり、三番目の写真は大人のクラスなんですけど、毎週土曜日 3 時間勉強して、この 2 人は見事日本語能力試験の N2 に合格しました。この 2 人は小さい頃日本に住んでいた経験があるんですけど、N2 だと難しいので、すごく頑張って今年は合格しました。真ん中は会話の映像です。右の男の子が「ケーキを買ってきたよ」と言って、女の子が「どんなの？」と聞いているような会話です。こういうふうに授業をやっていたという雰囲気だけをわかってください。

下の段に行って、日本から譲ってもらったひな壇を飾って、ひな祭りを紹介したり、節分の時には豆まきと日本文化の紹介をしたり、工作教室をやったり、習字のクラスをやったりしました。小学校の方では音楽の時間に東日本大震災の話と絡めて NHK で歌われている「花は咲く」という復興支援ソングを日本語で歌うという活動をしました。

東日本大震災の話をして、地球の反対側のブラジルに住んでいる君たちは日本に対して何ができるかなというのを考えさせて、じゃあ歌を届けようということになって、ちょうどその時に NHK のサイトで「100 万人の花は咲く」というプロジェクトがあって、そこに練習をした成果を

ビデオに撮って応募しました。そこで選ばれると、そのサイトにアップしてもらったり、もっとすごいとNHKで放送されるのです。NHKで放送されると、ブラジルに住んでいる日系人の人とか、ブラジルでもNHKを見ることができるので、おじいちゃん、おばあちゃんたちも喜ぶ、お家の人も喜ぶということで、応募しました。

そしたら、もう私が日本に帰ってきてから、4月くらいにNHKから連絡が来まして、今度、そちらのめぐみ学園から送ってもらったビデオを流しますと言われて、急いでブラジルの方に連絡しました。皆テレビの前で待って、日本でもちょうど時間が反対になるので向こうは昼間、皆待っていたそうなんですけど、何校から来たものが編集されて、くっついて全部で1分間です。うちの学校は全部で10秒くらいです。それでも皆喜んでくれたので、良かったなと思っています。

ブラジルに住んでいる日系人、日本人のおじいちゃん、おばあちゃんは結構NHKを見るんですけど、子どもたちはあんまり見ない子が多いんです。けれどもこれを機に、もしかして、映るかもしれないよ、と言っていたらちょっと興味を持ってくれて、一緒に見るようになったという子も増えたそうです。

次はこの下の写真、美術です。私立の学校なので、音楽でも音楽専門の先生が来たり、美術も校長先生の専門の教科が美術なので、校長先生が自ら美術の授業をやっていたりして、私も少し一緒にそこに出て授業をさせてもらっていました。絵手紙というのを教えて、日本の水彩絵の具を使って、絵手紙を作りました。やっぱり日本語を勉強している子が多いんですけど、たくさん文字で手紙を書くのは難しいので、自分の好きなものを一つ絵に描いて、名前を日本語とポルトガル語で書いて伝えようということで日本の勤務校、先ほど言った小学校の方に送りました。好きなものは何かってよく見ると、おにぎり書いていたり、キティちゃん書いていたり、ハム太郎書いていたり、男の子はポケモンを書いている子が多かったですね。

右側に行きますと、給食の写真があります。基本は午後からの授業なので、家で昼ご飯を食べてから学校に来る子が多いんですけど、朝からそのコースの方で日本語や英語の勉強をしていたらそのまま学校に残って、給食を食べて、午後の授業に入るという子もいて、その子たちと一緒に私も給食を食べていました。「いただきます」も日本語で言っています。カトリック系の学校なので、イエス様に感謝していただきますと、ちょっとお祈りも入るんですけど、「いただきます」と日本語で言う前から、生徒には「はい、どうぞ」と言わないと食べてはいけないと、そういうところもやっています。

ブラジルのご飯って、食べたことのある方わかると思いますが、タイ米みたいにけっこうパラパラしています。なので、終わった後の食べ残しが最初はすごくて、それも子どもたちで掃除をする習慣がなくて、お掃除の係の大人の人たちがやってくれるので、こぼしっぱなしのところがあつたんですけど、それを校長先生と私とで指導して、下の写真みたいに食べ終わった後に自分の食べたところは片付けるんだよって言ったりしたら、ちょっとずつ食べこぼしが少なくなって、もしこぼしても、自分で片付けるようになってきました。

次の写真は幼稚園です。幼稚園の方では全員で30分間集まって、日本語で歌を歌ったり、手遊びをしたりする「こんにちわの時間」という時間というのがあります。そこへ行って、私も日本語で歌を教えたり一緒に歌ったりしました。この動画では「こいのぼり」の歌を歌っています。これは子どもたちが大好きだった歌ですね。絵本で読み聞かせをしたり、母の日の出し物の練習としてえびかにつくすという日本の歌、ダンスを教えたりしました。

次は学校の外での活動です。ロンドリーナは北パラナ地区に入るんですけど、北パラナ地区の8校の日本語学校の生徒を集めて生徒交流会といって、一日日本語を使ったゲームや歌やダンスなどで遊ぶという日を企画してやりました。150人くらい日本語の学習者の子どもたちが集まりました。なかなか日本語を使う機会がないので、こういうところで皆で集まって日頃の学習の成

果を発揮します。ゲームなどで、先生たちが日本語で言うルールがちゃんとわからないとゲームが楽しめないよということで、また、来年のこの会に向けて 1 年間勉強しようね、というモチベーションアップにつなげています。

下の右の写真は日本語教師研修会です。日本語教師の先生たちに向けて、いろいろなゲームを教えたり、研修会を開いたりしていました。それから、日本人ということで、お話し大会でスピーチコンテストの審査員をやってくださいと頼まれたことがありました。

次は日本との交流です。さきほどの美術の時間に書いた絵手紙を送った学校から、その学校の子たちにも書いてもらって、ブラジルへ送り返してもらいました。その様子とか、日本の学校とスカイプで交流をしたりとかしていました。

○ブラジルに住む日系人の子どもの特徴

私が見てきたブラジルに住んでいる日系人の子どもの特徴についてお話しします。ある時、一緒に修学旅行に行ったんですね。そこに、他の普通のブラジル人の学校の生徒たちも来ていました。そうしたら、めぐみ学園のことを指して、こんな学校ははじめてだってそのインストラクターのお兄さんに言われました。どういうことかということ、インストラクターのお兄さんの話をよく聞いていて、どんどん進む、いちいち静かにしてねと言わなくてもどんどん話を聞いてくれて、他の学校より一つ多く遊ぶことができたねということでした。とてもお行儀のよい子たちです。それから、食べ終わった後のテーブルがきれい。食堂でも何校か一緒になるんですけど、うちの学校、めぐみ学園の子どもたちが立ち去った後のテーブルは他の学校と比べてきれいだった。さっき紹介した給食指導の成果やそれぞれ日系人の家庭のしつけの成果が表れたというか、日頃の行いが見えたかなと思っています。

それからディスコでは踊れないというのは、夜、その修学旅行の時にその宿泊施設で子どものディスコ・パーティがあって、そこで踊るんですけど、うちのめぐみ学園の日系人の子たちは踊れないんです。お立ち台は他の学校のブラジル人の子たちに占拠されていて、横から見ている、もしくは眠たいから帰りたいとか、そんな踊れないよという子がいたんですけど、校長先生の方針としても、ちゃんとここで前に出て行って踊らなきゃ、ブラジル社会では生き残れないみたいな感じで、どんどん行きなさい、眠たいとか言わないのとか言って、校長先生は率先して踊っていました。シャイでおとなしい子が多いなという印象です。

次は子どもたちだけでなく、私が見たブラジルに住んでいる日系人の特徴です。ブラジル人の人と比べて街づくりの効果があって、街を造る時、日系人たちはまずは真ん中に学校を造るそうです。ブラジル人、他の移民の人たちはまずは教会を建てる。何を一番大事にしているのかがよくわかりますので、日系人たちは子どもの教育が最優先だと思っているということです。もう一つ、大学に合格したければ、「ジャポネースを〇〇〇」ということで、「ジャポネース」は日本人ですね、「日本人を殺せ」という話を聞いたことがあります。なぜかということ、有名大学の学生の 3 割は日系人なんです。自分が大学に入りたいければ、日系人を一人殺せば入るみたいな、そういう言われ方をするのは、それくらい学力が高いということです。それから、「ジャポネース・ガランチード」、「保証付きの日本人」、これもよく言われる言葉ですけど、日系人はブラジル社会からも一目置かれている存在です。

それから私が見たブラジルに住む日系人の子どもの特徴。今、日本に住んでいる日系人と比べて、日本が大好き、本当に私が行って、日本のいろいろな話をしたり、日本語で話すだけで子どもたちがすごく喜んでくれて、自分の知っている日本語で一生懸命話そうとしてくれたり、うちのお父さん日本に行ったことあるよとか、今親戚が日本に住んでいるとか、すごく話をしてくれたり、それを自慢げに話してくれます。日系人としての誇りを持っているなと感じました。

それから、遊ぶ暇がないくらい忙しい。日本にいるブラジルの子を見てみると、あまり勉強が好きじゃなくて、あまり勉強していないという印象はあるんですけど、すごく勤勉です。休む暇がないほど忙しいってのは、学校は半日しかないんですけど、うちの学校みたいに午前中は英語や日本語を勉強したり、帰ってからはまた公文に行ったりとか、水泳に行ったり、フットサルに行ったり、一日中ぎっしり勉強して、その後また家に帰って、結構学校の難しい課題が出ていたりして、すごく勉強しているなというイメージです。

将来の夢を尋ねると医者、歯医者、弁護士というのが多くて、すごく大きな夢を持っている子が多いです。それにそういう医者、歯医者、弁護士は日系人が多くて、そういうのを目標にしているのだなというのを感じました。

私が思う今日本にいる外国籍の子どもたちに必要だと思うのはアイデンティティの確立、それから保護者の覚悟、日本人の異文化に対する理解、この三つです。多文化のこの中で生きていることをデメリットでなく、メリットだと思えるように、これから私も皆さんといろいろ考えながら、外国につながるのある子どもたちに関わっていきたいなと考えています。以上です。

池上

ありがとうございました。今日紹介されたブラジルの学校は日系人が運営するということだったので、いわゆるブラジルの公立学校とは違うわけですが、それを通したブラジルの日系人社会、そこの教育、学校の教科という話をさせていただきました。それでは次はクリスさんですね。どうぞ、前にお越しく下さい。

安藤

○自己紹介

皆さま、こんにちは。Boa tarde。池上先生がおっしゃったとおり、今日はポルトガル語で話してエウニセ先生に通訳をしてもらおう予定だったんですが、来てみたら、エウニセ先生がこの状態になっていたの、私も一生懸命頑張って日本語でお話しをしたいと思います。よろしくお願いします。

私は安藤クリスチーナと申します。ブラジル人です。現在は天王町にあるブラジル人学校 EAS 浜松校の先生です。今は教頭先生です。2人の子どもの母です。日本に来たのは 1996 年です。娘が6歳で、息子が8歳でした。ナヤラとネウシーニョです。

○子どもたちの学校と先生との出会い

日本に来る時やはり一番問題だったのは、学校です。だけど、子どもたちには学校は世界中で同じ、覚えることは同じ、ただ、別の言葉で覚えるだけ、「えーっ、でもその言葉を覚えるのが大変」、大変だけど、一生懸命頑張れば覚えるから頑張ってやりましょう。そう言って来日前の3ヶ月くらいはずっと子どもたちと話をして、「心配しなくてもいいよ、日本に行ったら、日本語を覚えて、日本の友達たくさん作って、それで暮らしましょう」、そういうふうに言って、来日して、おかげさまでそんなに大きな問題はありませんでした。私の子どもたちは日本の学校でいい先生たちに巡り合えたから、今2人ともブラジルで活動して幸せに暮らしています。

子どもたちは10年間日本の学校に通ったので、私は母として日本の学校と日本の先生にすごく感謝しています。2人とも来てから磐田の長野小学校に入学して、そこを卒業してから、息子は神明中学校、高校は浜松にある笹田学園に入りました。息子は8歳だったので小学校3年生のクラスに突然入って、やはり読み書きもちょっとあまりよくなかったんですけども、その時も助けてくれた先生が3人いて、今でも息子はその先生たちと連絡をとっています。名前は中村先生、

数学と柔道の先生、みつる先生、みつる先生は学校についていけない生徒たちのクラスの先生として、すごく私の子どもの力になりました。

こちらは高橋先生です。息子はバスケ部をやっているとして、高橋先生は部活の先生でした。中学を卒業する時期になって、この点数だとやはり公立の高校には行けないということがわかりました。息子はあまり勉強が好きではなかったんですね。頑張るけど、わからないことが結構あったので、やはりついていけなかったから、公立高校にはちょっと無理と言われました。けれどもその時、高橋先生が本当にすごく力になってくれて、「大丈夫だよ、お前バスケも上手だし、絵描きも上手だし、心もやさしくて明るいし、俺が力になってあげるから、高校いくぞ」と言って、それで笹田学園にバスケ部があるので、部活の関係で笹田学園に入ることができました。高橋先生のおかげです。その時はとても嬉しかったです。

○ブラジル人としてのアイデンティティとポルトガル語

それで、高校に入ってから、年頃の関係もあって、いろいろ問題も出てきましたが、私は子どもに日本に来て、日本のルールを守らなければならないけど、あなたたちはブラジル人だから胸を張って「私はブラジル人だよ」と言って、絶対に恥ずかしいことではないと伝えていました。

いつも子どもたちは学校では日本語だけで話しているけど、家の中ではもうほとんどポルトガル語でした。会話はポルトガル語、それで家の中でも本を読んで、マンガとかも全部ポルトガル語のものを用意して、それを読みなさいと言っていました。やはり他の国の言葉を覚えるのも大切だと思います。日本語を覚えることはすごくいいと思います。だけど自分の国の言葉も大切ですので、絶対に知らないといけないと思います。社会人になって、大人になって、会話はよくできていたんですけど、読み書きは練習しないから忘れることがたくさんあって、その後も練習しなければいけないと思って、手紙とか、メールとかを間違えて書いたら私は先生として恥ずかしいと思って一生懸命、家でポルトガル語を教えていました。2人ともやはり日本語で話をする、便利じゃないですか。娘も、「お母さん、私もお話をしたいのだけれど、でもポルトガル語でいうと思ったことを伝えられない」と言っていました。だったら、日本語で1回言って、それを私と主人が聞いて、それでポルトガル語ではこういうふうにお話しすれば通じるよと言っていました。だから子どもたち二人が日本語で話をしていたら、私は台所で何か料理を作っている、トマトとかきゅうりとかをパーンと投げたりして注意しました。それくらい厳しくしないと、やはり日本語だけになってしまうのです。

息子は高校、笹田学園を卒業して18歳になってやはり日本で働きたかったんですね。たくさんの友達も作って・・・あっ、いい経験の一つ忘れてしまいました。お弁当はブラジル人のお弁当を持って行っていました。そのお弁当も息子が作って持って行きました。友達が「あーっ、ネルソン、何それ？何食べているの？」と聞いて、「これはブラジルの料理だよ、僕はブラジル人だからブラジルの料理を食べるんだよ」って、「おいしいよ、食べてごらん」と言って、日本人の友達も少しずつ食べながら、ブラジルの料理を好きになって、うちに遊びに来る時にはもうブラジルの料理を食べていたんですね。やはり日本のお弁当はお母さんたちがすごく頑張って、お弁当箱もすごく、とてもおいしそうなお弁当を持たせるじゃないですか。ブラジルだと形は関係ない、ただ味だけが大事なので、ご飯とフェイジャウン、豆、それでウィンナーとか、お肉とか、野菜炒めとかを入れるから、あまりきれいにならないんですね。だから息子も「これは僕が作ったんだからきれいだけど、あんたは作れないでしょ？」と自分で作ったお弁当を自慢していました。

でも2人とも日本の学校に通っていていじめとかは一切なかったんですね。自分たちはブラジル人。それで今、先生の仕事をたくさんブラジル人の家族の悩みを聞きます。一つは日本の学校に通っていて、「私、日本人？ブラジル人？」とちょっと迷っていて、もう自分がわからな

い状態になるということです。それともう一つはブラジル人のお父さんを恥ずかしいと思うこと。お父さんがコンビニにいて、子どもが日本人の友達と一緒に歩いていると、お父さんがコンビニにいるのに知らんふりして通ってしまう。お父さんはお父さん、ブラジル人のお父さん、けどたくさんのブラジル人の生徒、過去に日本の学校に通っていた生徒が結構います。

私はブラジル人の学校で働いていたんだけど、日本人の学校に通わせる理由はやはり日本語を覚えさせるチャンスだと思ったからです。それでずっと小学校から高校まで日本の学校に通わせました。私は家の中ではポルトガル語で話していましたが、家族でブラジルに戻る時期になったら、やはり「帰りたくない。帰りたくない。就職したい。友達と離れたくない」といういろいろな悩みがあって、本当に空港に連れていった時に息子がもう悲しくて悲しくて、私も悲しくなりました。

○子どもたちはブラジルへ

1 回帰国する理由も一つあったんですね、私の中では。日本では日本人は素晴らしい人間だと思います。真面目だし、すごく働き者です。それで日本はすごくいい国です。私も日本に暮らしてもう 20 年になります。その間に 1 回だけブラジルに行ったことがあります。私は日本のことがすごく好きです。でも、18 歳、20 代の若い人たちには他の国にも行って、いろんな経験をしてもらいたいです。日本ではライン作業ですので、もうロボットみたいに皆ばんばんばんのように仕事して、タイムカードおしたら、うちに帰ってもうダウン。疲れて、週末になっても友達と遊びたいけど、疲れています。ブラジルでは仕事をするけど、工場ではなくて、事務とかの仕事に就いて、大体、午後 6 時には皆上がるんですね。それで 6 時に上がってから、またジムとかに行ったり、友達と遊びに行ったりするので、そういう経験を子どもたちに与えたかったんですね。私が通った道を子どもたちにも与えてあげたかったのです。日本にいと 18 歳でもう現場に入って、仕事、仕事、仕事。それが将来にいいのかと思うと、よくない。それでブラジルに行って、大学に行って、できればブラジルで就職してほしいと考えました。できなかったら、日本に戻ってもいいと伝えておきました。

それでブラジルに帰ったら、息子はすごく明るい子で誰とでもお話しができるので、すぐたくさんの友達を作りました。日本の 18 歳のブラジル人の若者たちは高校を卒業するとあまり大学の話をしません。専門学校に入るとか、仕事に就くとか、そういう会話だけをするんですね。日本の日系人の方たちの中で高校を卒業したら、必ず大学に行かなければならない、そういう会話はあまりないです。大学の話を家族は本当に少ないですね。日本人の若者たちは多分そういう大学の話をしなくて、息子の友達はもう就職するという話をしていたので、とてもそこは親の力じゃないと前に進まないと思います。息子がブラジルに帰ったら、同じ 18 歳の若者たちは大学の会話しかない、どういう大学に入るのか、どういう勉強をしたいとか、なので息子も本当にブラジルに帰って 6 カ月間ポルトガル語の勉強をして、それでコンピューター関係の大学に入りました。それで息子も私に言ったんですね。「はじめて真面目に勉強しているよ、お母さん。日本にいた時はあまり真面目に勉強しなかったんだよ」と。

【動画の切り替え】

こちらが息子の大学の卒業式の日です。卒業論文の発表をして、それに受かったら卒業できる、受からなかったら卒業できないという制度です。やっと受かったんですね。娘は息子に「卒業論文、勉強しなさい」とずっと言っていたので、やっと息子が合格して、娘が安心できるという意味で、フェイスブックにお兄さんへのお祝いのメッセージを書きました。私が一番嬉しいのは、この 2 人が恋人同士のようにいつも一緒に、娘の友達も息子の友達も皆一緒にいることです。だから遊びに行くときもいつも一緒にいるから、私もフェイスブックで子どもたちの写真などを見

ながらすごく安心します。子どもたちはブラジルで活動をして、仕事をしているから、私も日本で安心して頑張ることができます。以上です。どうもありがとうございました。

池上

クリスさん、どうもありがとうございました。幼少時のエピソードでやはりどこかでいい先生に出会ってサポートがあって、頑張ったんだと、胸を熱くして聞いていました。それでは最後の報告者です。カルドーゾ多美さん。ポルトガル語での発表ですが、先ほど紹介した日本の大学に進学した息子さん、田中琢問くんが通訳をします。本学の国際文化学科の2年生です。よろしくお願いします。

カルドーゾ

○自己紹介

カルドーゾ多美です。日本の幼稚園と保育園で10年近く勤めています。外国人児童相談員として務めています。子どもは4人いて、4人とも日本生まれですが、ブラジルに住んだ時期もあります。現在、子どもたちはそれぞれ大学、高校、中学校に通っています。今日は自分の経験、自分の子どもたちの経験、そして少しブラジルと日本の教育の違いについての話をしたいと思います。私の日本語は完璧ではないので、今日は息子の力を借りて話をさせてください。よろしくお願いします。

○多様性の国、ブラジル

「教育は未来へのパスポート」。全ての土台となるのは教育だと思います。将来、成功するためには教育が必要です。まずは簡単な質問から入っていきたいと思います。この写真を見てほしいんですけども、この人たちはどういった国籍の人たちなのか、一度考えてみてください。ブラジル、日本、アメリカ、どうですか。彼らに共通点が一つあるんですけども、わかりますか……。皆、ブラジル人です。こちらはブラジルの有名人で、皆さんもご存じかと思いますが、見た目はさまざまですけども、全員ブラジル人です。たとえば、ペレ、セナ。

なぜブラジルの歴史について話をしているのかというと、この人種やエスニックの多様性はブラジルの教育に大きな影響を与え、今でもブラジルの教育に影響を与えているからです。ポルトガル人、ヨーロッパ人、そして日本人の移住からはじまり、日本人移民は1908年6月18日に初めてブラジルに到着しました。この多様性はブラジルのそれぞれの地域や州に独特な教育スタイルを生み出しました。それと比べて日本では、たとえば栃木、長野、静岡、どこへ行っても教育制度が変わることはありません。

○日本とブラジルの教育制度の違い

こちらは日本とブラジルの教育制度の違いについての表なんですけど、子どもたちが日本とブラジルの学校に通った際に私自身が気付いたものです。まずは一学年の区切りがブラジルでは1月から12月で、日本では4月から翌年の3月までとなっています。ここには大きな違いがあります。ブラジルの学校の時間帯は半日のみとなっております。午前中と午後の授業を選ぶことができます。午前中は8時から12時、午後は13時から17時となっています。教育制度はそんなに変わらない、小学校6年間、中学校3年間、高校3年間、大学4年間。大学によって5年間、3年間もあります。

入学式はありません。学校の清掃なんですけども、生徒たち自身による清掃というのは存在なくて、清掃員と呼ばれる方が雇用され、その人が掃除を担当します。

給食ありません。家庭訪問とか三者面談もなし。運動会、清掃方針もなし。プール授業もなし。ブラジルの学校にはプールはありません。家庭科もないです。避難訓練はありません。修学旅行もありません。健康診断もありません。

英語の授業は幼稚園からあります。スペイン語も一緒に行われています。子どもが何か問題を起こした時、注意と言うのがあります。1回目の注意では生徒と話をします。2回目は親も一緒に呼んで話をします。3回目には退学処分となります。卒業式はあります。

これらの違いというのは些細なことだと思われがちなのですが、ブラジルから日本に来て、日本の学校に入ると、この違いが大きな課題となりうることもあります。親にしても学校の活動と一緒に参加することに慣れていないため、とても難しいこととなります。

一つ大きな問題は食事の違いだと思います。ブラジル人は全部一つのお皿に入れて食べる習慣があります。日本人はちゃんときれいに食材ごとにわけける文化があります。私は個人的に日本の食事が好きです。ぱっと見るとブラジルの一般的な食事の方がおいしそうに見えます。皆さんはどう思いますか。しかし、日本の食事の方がしっかりと栄養があって、バランスも整っています。ブラジル人の子どもたちにとって、日本の給食は見るだけでぞっとするようなものです。私が幼稚園とかで相談しているブラジル人の子どもたちを見ていると、シラスや納豆を見て「この虫を食べたくない」と泣きだす子どもたちがいます。食事の問題が原因で学校に行きたくないという子どもたちも実際にいます。外国人の子どもたちが日本の食事、食文化に適応させる方法を考える必要があると思います。日本人側も外国人に対して少しでも食事を適応してくれることが大事だと思います。

○文化の違いから生じたトラブル

次は私が実際に見たり体験したりした文化の違いから生じたトラブルについてです。ブラジルではハンカチは鼻をかむために使います。日本人は手をふく、乾かすために使います。これは主に幼稚園、小学校の子どもたちの間で問題になりがちです。これがきっかけで日本人の子どもたちと外国人の子どもたちの間に摩擦が生じます。もう一つの違いは日本人はお皿を口まで持って、食べる文化があります。ブラジルでは多くの家庭はそれが行儀悪いと思っています。私自身も子どもたちにそのようなことはしないでと注意したことがあります。しかし、子どもたちを日本の学校に通わせることにしたので、子どもたちには日本の学校では日本の文化に従って、家庭内ではブラジルの文化やルールに従って生活するようにしました。

次に特に小学校や中学校の子どもたちの間で問題になりがちなのは、水泳や体育の授業の時に友達と同じ教室などで着替えることです。現在、私が抱えている問題は、人前で着替えるのが恥ずかしくてプールの時間や体育の授業に参加したくないという子どもたちがいることです。しかし、彼らは言葉の問題で担任の先生とコミュニケーションがとれず、通訳してくれる指導員がその場にいないければ、先生はなぜその子が入りたくないのかを知ることができません。多くの場合、その文化の違いを理解していない日本人の先生や保護者は、外国人の子どもたちはただわがままを言ったりすねていて先生のいうことを聞かないのだと解釈してしまう場合があります。

もう一つの違いは給食中に牛乳を飲む習慣です。ブラジルの子どもの中には給食中に牛乳を飲むと、吐きなくなったり、吐いたりするという子どもたちもいます。このような文化の違いの影響を受けて、幼稚園の段階から日本の学校のことが嫌いになってしまう子どもたちがいます。

○日本の学校の長所と短所

次に日本の学校の良い点と悪い点について少しお話しします。良い点ですごく大切だと思うのは規則的な日常生活を教えてくれることです、朝早く起きて、バランスの整った食事をとるとい

うことです。3 年前にブラジルに行ったんですけれども、子どもたちは学校に行くために朝早く起きるのですが、好きな時間に寝ます。ある日の夜、外に遊びにいったら、次の日に学校があるにもかかわらず、午後 1 時 3 0 分頃にデパートで遊んでいる子どもたちがいました。

保護者が参加する学校行事については、ブラジルの学校ではそのような活動はありません。私の子どもたちは 2 年間ブラジルの学校に通ったのですが、私は年に 3 回先生との保護者会に参加しただけです。

日本では子どもたちが運動したり遊んだりする広い空間があります。ブラジルでは普段全て閉まっていて、唯一遊べる場所は体育館です。日本では学校にプールがあります。当番活動があります。この当番活動を通して子どもたちは他人と協力するということを学び、それで社会に出た時にまた人と協力することを実践することができます。また、地域住民とふれあうという活動もブラジルには存在しません。この活動は子どもたちに目上の人を尊敬することを教えるので大切だと思います。

周りの自然にふれあう機会。自然や、動物、植物の中で育っていった子どもたちは比較的やさしい子だと言われます。私は鶏とか豚とかに囲まれて育ったので、私はやさしいと思います。

読書の奨励。読書は子どもたちの知性や想像性を豊かにするものです。読書することは子どもが一步前に出る一つの方法です。私自身読むのが大好きで、その影響で息子も好きになったのかもしれません。息子は一日中と夜遅くまで布団の中にこもってずっと読書ばかりすることもありましたので、ときどき喧嘩をして本を隠さなければならなかったこともありました。しかし、現在、息子が今まで読書したことの結果が出ていると思います。たとえば、私はよく英語の本やかるたなどを使っていました。息子は英会話学校に行ったことがなく、独学で英語の勉強を始めたんですけど、英検 2 級に合格しました。それは息子が小さい時に英語の図などを見ていた結果かもしれません。

基礎は幼稚園と小学校だと思います。幼稚園に通っている子どもたちはちゃんと正しい日本語を覚えなければなりません。私は実際に日本の学校で働いていて、ときどき外国人の子どもたちがちょっとうるさくて他の子どもたちに迷惑をかけるということで別の教室に移動させられたりするのを見ますが、それだとやはり子どもは日本語をちゃんと覚えることができません。今のうちに正しい日本語を覚えないと、小学校に上がった時に子どもは無関心になってしまうかもしれません。

次には日本の学校の悪い点についてお話します。子どもに給食を残さずに最後まで食べさせること。日本人の親や子どもが外国人の文化や風習に対する理解があまりないということ。外国の文化を日本の親や子どもに伝えるための活動がもう少しあるべきだと思います。また、外国人の親に向けた教育指導も少ないなと思います。日本に住んでいる外国人の子どもたちのなかには、規則的な生活ができていない子が結構います。私は 10 年くらい日本の学校で働いているのですが、朝食を食べてこない子どもたちがたくさんいます。日本人は朝食が脳を活性化させたり、エネルギーを与えたりするという効果があるのを分かっているのに、朝食を大切にします。しかしブラジル人保護者の多くはその大切さを分かっている、あまりそういう情報を持っていないのが現状です。もう一つは日本人の保護者は子どもが小さい時、幼稚園に通っている時に睡眠の大切さ、子どもを早く寝させることの大切さを知っています。成長ホルモンは午後 10 時から夜中の 2 時くらいに分泌されると言われますが、それは 子どもたちが寝ついてその 1 時間後に分泌されるということで、幼稚園の子どもたちは理想的には遅くても午後 9 時には寝なければならないということを外国人の親はあまり知らないと思います。

○ブラジルの学校の長所と短所

次にブラジルの学校の良い点を挙げてみたいと思うんですけども、あまり多くありません。他の言語を覚えるのはとても大切だと思います。ブラジルの学校は幼稚園から英語とスペイン語を教えます。ブラジルでは外国の文化を紹介する活動や発表がたくさんあります。もう一つはブラジルの学校では宗教教育、主にキリスト教の教育があるということです。学校によってはないところがあるんですが、多くの学校では宗教教育が実施されていて、私はそれが重要だと思います。悪い点を挙げてみると、もっとあると思うのですが、とりあえず私がもっとも強く学校にあるべきと考えるものを挙げてみました。子どもたちが遊べるような広い空間やプールがありません。地域住民との交流がありません。親が学校に行って参加する活動がありません。全員で行う掃除や親が学校を訪問する活動がありません。子どもたちによって行われる当番活動や掃除が存在しないということです。

この写真にはブラジルの学校で行われるさまざまな国をベースにした多文化的な活動の様子が写っています。インドやドイツなどの文化を取り入れて学校で発表します。男の子と女の子が映っている写真は「フェスタ・ジュニーナ」（6月祭）と言われて、この文芸大でも昨年度行われました。日本の他の学校や大学でもこの文芸大で行われたようなフェスタ・ジュニーナのような行事をもっと行うといいなと思います。それは大切なものだなと思います。

こちらはブラジルの教室の様子です。幼稚園、小学校、中学校、高校、大学です。ぱっと見たところあまり違いはありません。大きな違いは右上の幼稚園の写真にあります。私の息子たちも通ったブラジルの幼稚園ですが、子どもたちが机に座って学習したり、活動したり、絵を書いたりする活動があります。子どもたちがブラジルの学校に通った時にここに大きな違いを感じました。日本では外で体操したり、走ったりして、机から離れる活動がたくさんありますが、ブラジルでは教室にずっと座ったまま活動をしします。

○家庭内での日本語教育

最後に私が実際に子どもたちと経験したことについてお話しします。私の長男が幼稚園に入った時、一番の問題だと思ったのは言語です。私は先生たちの言っていることが理解できませんでした。学校のルールも分かりませんでした。全ての活動に参加しようとしたんですけども、その言語の壁があったことによって、できなかった活動も多かったです。それで、日本人のお母さんたちが私から離れていったことに気付きました。なぜかという活動に参加しようとしなかったからです。私は日本人と仲良くなりたかったので、とても悲しかったです。そこで子どもたちと一緒に日本語を勉強しようと決心しました。私自身は幼稚園に入って勉強することはできませんでした。家の中では子どもと日本語で話してはいけないなと思いました。なぜなら、私自身が日本語を完璧に使えなくて、息子たちには正しい日本語を覚えてほしかったからです。まずは単語を覚えるところからはじめました。たとえば、日本語で冷蔵庫の名前がわからなかったら、その単語を調べ、紙に書いてそれを冷蔵庫に貼っていました。家中がその日本語で書かれた紙だらけになりました。今でも家のいたるところに漢字で書かれたものが貼られています。特に家族全員が毎日使うトイレに貼ってあります。これが私が経験した一番難しい課題だったと思います。

それでどの子どもも嫌いと思う書き取りというものが出てくるようになりました。私はひらがなさえろくに書くことができなかったのも、子どものサポートをすることができませんでした。私にとってそれはとても辛くて難しいことでした。ここで子どもと一緒に勉強しようと決心したのですが、小学校の内容は幼稚園と違ってより難しくなっていました。そこで小学校1年生の息子の担任の先生に私も書き取りをやると言って、息子が毎日書き取りを先生に持っていったん

ですが、はなまるをたくさんもらっていました。息子自身も私に負けたくなかったので、息子も書き取りをたくさんするようにしました。結局息子には負けてしまいましたが、これは私が私なりに発見した子どもに日本語教育をするためのサポートでした。外国人と関わっている全ての方々は創造的な方法を見つけて子どもたちがスムーズに適応したり、日本語を覚えたりするための活動を考えることができると思います。それができれば、子どもたちは苦痛、大変なことだと思わずに正しい日本語を覚えることができると思います。

短い時間でしたが、日本とブラジルの教育制度の違いを少し伝えられたかと思います。この知識が外国人と関わる方に、またそうでない方にも役に立てば嬉しいです。最後に皆さんにメッセージを伝えたいと思います。私たちは皆違います。お互いにその違いに関して尊敬しあうことが大切です。外国人と日本人が共生していくためには一方的な支援ではなく、お互いに力を合わせていけばよい未来が待っているのだと思います。そのために自分の立場で精いっぱい頑張りたいと思います。1人の力では何もできないかもしれませんが、今日、この話を聞いてくれた皆さん全員が少しでも協力してくれれば大きな変化を生み出せます。今日は本当にありがとうございました。

池上

タミさん、そして琢問くん、ありがとうございました。

【休憩】

第2部 質疑応答

池上

○第9回フォーラム報告書の紹介

すごくいっぱい素敵な話を聞いて、私も改めてなるほどということが多くありました。今日皆さんにお配りしたピンク色の冊子、第9回のフォーラムの報告書なんですけれども、もう残部がありません。全て皆さんにフィードバックすることができました。もっとほしいという方がいらっしゃると思うんですけれども、多文化子ども教育フォーラムと検索するとおそらくこのサイトに出来ます。これは大学のサーバー上にある私のホームページなんですけれども、ここに資料が載っています。前回だと「ブラジル人カウンセラーによる子どもと保護者の心理分析」というコーナーがあって、当日配布資料もこの中に入っています。さらに「日ポ対訳報告書」をクリックすると、本学の学術レポジトリのサイトに移ります。そのページの下の部分のコンテンツ本体、これをクリックすると、PDFファイルに飛びます。で、PDFファイルをそこからダウンロードすることができます。ちょっと分かりにくいんですけど、多文化子ども教育フォーラムを開いていただくのがカギです。そうすると、今回の報告書やあるいはその前の1月にあったポルトガル語での討論会の報告書などもそこからダウンロードできます。

○多文化子ども教育フォーラムのメーリングリスト

もう一つぜひ皆さんにご紹介したいのはメーリングリストです。この多文化子ども教育フォーラムはお金かけないでやる会ですから、あんまりチラシをあちこちに配っていません。なので、FICE (Forum on Intercultural Children's Education) のアドレス、fice2012@gmail.com に宛てて、件名欄は「メーリングリストに参加希望」と書いて、お名前、所属などを入れて送っていただくと、メーリングリストに登録されます。今度こういうフォーラムをやるよというご紹介や

関連の情報などをお送りしますので、ぜひこのメールアドレスをメモしていただければと思っています。お金をかけずに開催するという方針があるので、ぜひこちらへの登録をよろしくお願いします。

○グループ・ディスカッションの呼びかけ

それでは、ちょっと近場の人と集まってもらって、ちょっと皆さん同士でワイワイやった方が口も滑らかになるかなと思うのですね、聞いてこんなのだったよというのを、せっかく今日来たのですからね、列ごとにちょっと後ろを向いて近場の人となんとかグループになってちょっと意見交換をしてみませんか。この後に全体のグループ・ディスカッションを行います。

【近隣の人たちで向き合ってグループ・ディスカッション】

全体ディスカッション

それでは、全体ディスカッションに移りたいと思います。各グループからこれはぜひ聞いておきたいと思ったことを出してください。

加藤

日本語 NPO の加藤と申します。今日はいろいろな話をありがとうございました。タミさんにお聞きしたいんですが、息子さんは日本生まれでいらっしゃるのですね。日本生まれでありながら、どうしてバイリンガルにこう育ったのですか。お母さんの通訳もできるくらい素晴らしいポルトガル語能力があり、そして大学では英語も専攻していらっしゃるということは、マルチリンガルということですね。その秘訣を教えてください。

カルドーゾ

最初も話をしたんですけども、幼稚園の時からすごく心配して、正しい日本語を覚えてほしかったんですね。そのために私も一生懸命頑張って日本語を覚えようとした。家の中でももうブラジルのテレビはなしで、ブラジルの漫画や絵本とかも全部捨てて日本のものだけにしました。それで日本語のものを買って、日本語と英語のカードを買って、おもちゃも全部日本語の文字がついたおもちゃを買って、ポルトガル語が書いてあるものは全部なしにしました。幼稚園から日本語を正しく覚えると、小学校へ行ったら大丈夫じゃないのかなと思って。

でも大切なのはやはり親子の関係、信頼関係を作ることです。子どもも悩みがたくさんあると思うんですけどね。小学校に上がると宿題があるし、中学校に入るともっと難しくなります。そこで、その信頼関係を作って、悩みとかトラブルがある時は親から話ができる、それでそれから少しずつ、勉強もそうなんですけど、少しずつ乗り越えて、目的を持ってその目的を達成するためにこうしないといけないな、それはちゃんと親が伝えるべきだと私ずっと思っていたんですね。だから、ずっと勉強しなさい、勉強しなさいと子どもたちにいうと、子どもたちは逆にやりたくなくなっちゃうから、まず、勉強しないとレオパレスにずっと住んで、コンビニでずっとアルバイトする生活になっちゃうよと、私ずっとその話をしているんですね。だから、好きなことをやりたいなら、まずは勉強しないといけないよと言ってきました。勉強したくないならいいんだけど、勉強しないならずっとレオパレスに住んで、ずっとコンビニでアルバイトしてくださいと。

田中琢問

一つ補足します。ポルトガル語がなぜ上達できたのかという質問だったんですけども、日本

語が定着して、使えるようになったなと思った時に親にポルトガル語を覚えてもらおうようになって、ちゃんと教科書買ってもらったり、印刷したり、親から教わってポルトガル語を勉強していました。

カルドーゾ

私が大切だと思ったのは、まず一つの言語をしっかり覚えてから次にもう一つの言語を覚えることでした。ポルトガル語がわからないまま同時に日本語を覚えていくと、子どもの頭の中が混乱しはじめます。

加藤

何歳の時にポルトガル語の教科書を使いはじめたのですか。

カルドーゾ

小学校になってもう日本語がぺらぺらになったので、ポルトガル語を覚えなければならないなと思って、家で教えました。

池上

これはちょっとタミさんの家族の特殊事情かもしれません。リーマンショックの時に就労を目指すための日本語教室がたくさん開かれましたよね。磐田では「いわしんバーモス日本語教室」というのがありました。磐田信用金庫が支援して、ブラジル人の講師がポルトガル語を使いながら日本語を教えていたのですが、その教室の先生の一人がタミさんでした。同胞が本当に困っている時に二つの言語を使って助ける、その姿を今から思うと 7 年前、琢問少年はきっと見ていたはずです。ブラジル人がなんかしんどい時にお母さんが日本語を学ぶ人たちのサポートをするその姿も大きく影響したんじゃないのかなと思うんだけど、どう？

琢問

それは影響あったと思いますし、自分自身もちょっと親に日本語を教えたりしていたので、それをさっそく仲間たちに実践していてすごいなと思っていました。

池上

それではここからは全体に開いていきます。皆さんに共通する質問も多々あるかと思います。

質問者

貴重な話をありがとうございました。安藤さんとカルドーゾさん、お二人の話を聞きたいんですが、お子さんを日本で育てる際に、高校進学とか大学進学についてはどのようにして情報を得たのか聞きたいのですが、お願いします。

安藤

中学の時のお話もあったんですが、部活の先生、高橋先生という方が勧めてくれたおかげで高校の情報を得たのです。その高橋先生はバスケット部つながりで笹田学園の先生とお友達で、推薦での入試を受けて高校へ行くことを実現しました。

カルドーゾ

三者面談で先生から話を聞いて、わからないことがたくさんあったので、自ら担任の先生にたくさん質問をしていました。先生がいろんな情報を提供してくれました。

質問者

その時に他の日系ブラジル人の方の親御さんから、就業や子どものその先の進学について情報を得たことはありましたか。

安藤

話をしましたが、経済面の問題で行かせられるか行かせられないかという問題があって、他の親たちはちょっと高い、お金がかかるからということで断念したんですけども、息子には学校に行かせたいと思ったので、行かせました。

カルドーゾ

周りの知り合いの親たちは高校進学などの経験がなかったので、知り合いから情報を共有することはありませんでした。現在はある程度知識を持っているので、保護者に質問される側になりました。

質問者

坂柳さんとカルドーゾさんへの質問なんですが、ブラジルの学校に宗教的な教育、要素があるとは伺いましたが、その宗教的な要素にはどのような利点、メリットがあると思いますか。

坂柳

私がいためぐみ学園ではその学校をつくった日本人が日本でもカトリック教徒だったということで、学校自体もカトリックの考えはあるんですけど、子どもたちの要素まで、その学校教育とかにあまり強く宗教とかを出していなくて、本当にご飯を食べる前にお祈りをして食べるくらい、他の場面ではあまり見ていないですね。校長先生の家族と日曜日に一緒にご飯を食べる機会もあったんですけど、そのお家でもご飯を食べる前にお祈りして、そこだけは学校でも同じようにやっていただけで、そこまで学校の中で宗教教育があったことでよかったところまでは見えていないですね。

カルドーゾ

私自身がキリスト教徒なのでキリスト教の宗教的活動をやっている学校に入れました。その利点としては、隣の人を尊重し、やさしい心を持つことの大切さを学びながら成長していくということです。だから息子はやさしいと思います。

鈴木

浜松国際交流協会の鈴木です。多文化共生センターの方に勤務しております。普段外国にルーツを持つ若者たちとは接することが多いんですけども、保護者の方の話しを伺う機会はなかったので、貴重な機会でした。ありがとうございます。タミさんに質問です。お話のなかにあった日本の学校の悪い点のひとつとして、外国人の親等に向けた教育懇談会が少ないということだったんですが、たとえばいつの時期に、小学校、中学校、高校、そしてどういう話をしてもらう機会があれば助かるなど、そういうことありますか。

カルドーゾ

たとえば1年間の間に3回、4回くらい外国人向けの講演会とかあればとても助かります。私も日本の幼稚園、学校が決まった時は本当に日本のルールとか、日本の生活習慣もわかりませんでした。日本人にとっては早く起きて、朝ごはんちゃんと食べて、朝のうちに家を出てということは、本当に当たり前のことだと思うんですけど、私たち外国人としては本当に難しいことです。その習慣生活がない、ある家庭はあるんですけど、子どもたちは自由、遅く寝て、お昼時間が決まっていないし、だからブラジルから来ている保護者や子どもたちはそれがわからないのです。日本人には当たり前のことだけど、私たちはわからない。だからブラジル人保護者が日本の学校を選ぶ時はそのブラジル人保護者向けの講演会をやりとすごく助かります。その学校の1日の流れとか、習慣、生活とか、日本の文化とか日本のルールとかを教えたら本当に助かると思います。

池上

鈴木さんの質問もう一つありますよね。たとえば小学校1年生の時にこういうこと、小学校6年生のときにこういうことというように、いつ、何を教えるといいですか。

鈴木

たとえば中学校の時に高校入試の情報を教えてほしいとか、高校になったら、その高校を卒業した後の進学先や就職先とか、どういう情報を教えてほしいか。

池上

もう一つ、子どもの成長の段階のどの時期にどういう情報を伝えるといいかということですね。

カルドーゾ

子どもの成長も多分外国人はあまり気にしていないですね。日本では3歳の子がもう自立しているのですね、自分で靴を履いたり、自分でお尻を拭いたりとか、それは日本人の子たちは幼稚園に行っただけで学んでんですけど、ブラジルの子たちは全部保護者がやってくれるんですね。だからその保護者はそれが大切なことだということがわからないんですね。小学校に行っても子どもができることはやらせる方がいいとは思いますが、日本の学校からそれを教わったら保護者ももっと意識が高まると思います。

中学校と高校は、子どもたちは日本語がわかると先生は思うから手紙は全部日本語ですね。子どもはわかるんですけども、ポルトガル語に翻訳して親に伝えることはできません。だから日本語がわかっている親に説明できないです。中学校と高校はあまり通訳の先生はいないですね。だから先生と話しても、子どもはわかっているんですけど、親がわからない。だからどこの高校に行けばいいのか、私は塚間がポルトガル語も覚えて日本語も覚えてくれて本当に助かるんです。負担をかけると思うんですけど、本当に私がわからないことを全部任せて、自分の時だけじゃなくて、弟たちにも私がわからないことがあるとき全部塚間に頼んで、全部通訳してもらって本当に助かりました。他の保護者の子どもたちは日本語からポルトガル語を覚えるんですけど、日本語を覚えてしまうと、逆にポルトガル語の通訳ができなくなります。保護者と子どものコミュニケーションもなくなるのです。だから中学校と高校の時も一生懸命子どもたちが高校まで行ったので、保護者にもポルトガル語で全部じゃなくていいので、少しでも手紙や相談の時にポルトガル語の通訳をつければ助かると思います。

池上

今日は浜松市教委から市川先生が来ていらっしゃるの、市教委の看板を背負わなくてもいいですから、一教員の視点から感じたことなどをどうぞお話しください。

市川

今日はどうもありがとうございました。今、進学の話も出ましたが、本当に日本語の指導が必要な児童生徒が千人を超えている状況で進学に向けてどういう指導をしていけばいいかなと考えているところです。安藤さん、タミさん、そして琢間さん自身にも聞きたいんですが、その高校に進学を決めた理由とそのブラジルの大学を選んだ理由、保護者として日本の大学ではなく、ブラジルの大学に進学させようとお考えになった理由、それからタミさんには日本の大学を選び、どちらに就職されるかわかりませんが、どのような将来を描いているのか、琢間さんには、今後、どうしていきたいのか、そのために自分はどんな努力が必要なのかということを聞かせてもらいたいと思います。また、坂柳先生にも豊橋のその辺の話しをしていただけたら嬉しいなと思います。以上です。

安藤

子どもたちは小学校から高校までのおよそ 10 年間日本の学校に通いました。家の中でどれだけポルトガル語を教えても、どれだけ子どもたちにポルトガル語をしゃべらせても、家庭内のコミュニケーションは社会でのコミュニケーションとして使えるようなものではありません。子どもたちが大人になって労働市場に入った時に、そのままでは子どもたちのポルトガル語の読み書きと会話能力が不十分だと思いました。そこで、彼らがブラジルに帰国し、ブラジル社会の中で生きてみて、ブラジルの大学に通いながらポルトガル語能力とブラジルでのコミュニケーション力を向上させ、「ブラジル人」であることに誇りを持ってポルトガル語を完璧に話せるようになることがとても重要だと思いました。

もし子どもたちがブラジルに適応できなかった場合、日本に帰ってきてもいいというつもりだったのですが、私個人としては彼らがブラジルに適応することを願っていました。なぜかというと、日本での生活は若者にとって非常にハードで厳しいと思うからです。若い人たちには視野を広げたり、他の文化やものを知ったり、新しいものを見たり、祖父母やその他の親せきの人たちとふれあったりすることがとても大切だと思います。日本にいる多くのブラジル人たちはこのような経験ができないので、私は親としては彼らからその機会を奪いたくなかったのです。私自身はそれを経験しています。おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に暮らしていろいろな話を聞いたり、従弟たちとは全員集まったりすることがありました。

日本で生活していると、ただ働いて家に帰るだけです。週末にはたまにイベント等がありますが、ブラジルではもっと楽しく生きられると思うので、子どもたちにはそれを選択しました。

本当は子どもたちが日本に戻ってくると思いましたが、彼らは日本に戻りたくないと言っています。日本への興味が薄れているようです。日本では一軒家を持っていたのですが、それを売ることにしました。私は日本での定年後にブラジルへ帰国するための準備を始めています。

カルドーゾ

琢間が小学校 3 年生の時、私、離婚したのですね。子どもが 4 人いて、日本での生活は本当に大変でした。家族、お母さん、兄弟は皆ブラジルにいて、私だけ日本にいました。その時、よく考えてブラジルに帰るしかないと思って、琢間が小学校 3 年生の時に帰りました。その時、もう日本には戻らないつもりでした。ブラジルに 2 年間ずっと住んでいましたけど、琢間たちがその

2 年間すごく悲しくて、もう毎日日本に戻りたい、友達に会いたい、先生に会いたいと言って、もう本当に大変でした。何回も泣きました。ブラジルの学校に行って、すごくいい友達を作ったんですけど、ポルトガル語が分からなくて、ポルトガル語の点数が低くて、ずっと泣いていて、何度も先生が電話をして、「ママ、来て、琢問泣いているから、どうすればいいかわからない」と伝えてきました。何度も学校へ行って、大丈夫だよ、低い点数とっているけど、頑張れば大丈夫だよと、ずっと声をかけたんですけど、息子たちはやはり日本が好きだったんですね。

私にとってはブラジルの方が楽です。兄弟が 5 人いて、お母さんもいたので、私は正直言うとブラジルの方が楽。でも、子どもたちの苦しみを見てやはり日本に戻らなければならないなと思って、戻ったのです。その 2 回目に戻った時は私はもうブラジルには帰らないと決めたんですね。だから帰ったり、戻ったりすると、子どもによくないと思う。日本語も覚えられないし、ポルトガル語も覚えられない。だからここで頑張って、高校入って、大学も行くというのは私の思いだったんですけど、それを琢問に話したことはないです。でも自分で大学に行きたいと言って、自分で頑張って、進学しました。

琢問

僕の意見も交えてという話なんですけれども、どういったことをやっていきたいなというのは、高校入った時点では、ちょっとまだ全然具体的なイメージがありませんでした。この場で言うのもなんですけど、僕、学習ボランティアの学習支援室で勉強していたんですけども、そこに文芸大の学生が教えにきて、それがきっかけでこの大学を知って、自分もこういうことやりたいということで、そこから動き出したのです。

これからどうしていきたいというのは自分自身外国籍児童のロールモデルになりたいと思っておりまして、将来外国人向けに日本語教室というのを開きたいなというようなことを思っていて、実現するかどうかはわからないんですけど、そういうのを考えています。ここらへんの地元で仕事することになると思うんですけども、ブラジル人たちにも日本人たちにも住みやすい環境になるためにはどうしたらいいのかということを考えながら、頑張ります。

池上

琢問くんが今言っていた学習支援のところというのは、磐田市多文化交流センターです。今日磐田市からもお二人来ていただいていますけれども、外国人が集住している東新町団地のすぐ横にあります。そこにあるセンターで 2004 年に学習支援が始まりました。そこはちょうど今 10 年経ったところで、琢問くんがその支援を受けた最初の子供です。その子が大学に入って、今度は教えに行く側になりました。高校生の時にセンターへ教えに行っていたのは、今後ろに座っている本学のブラジル人学生の 2 人、鈴木、宮城の 2 人で行っていたということですね。ありがとうございます。それでは、坂柳先生にも質問があったので、回答をお願いします。

坂柳

豊橋市の外国籍生徒への進路指導についてですけど、中学校ごとそれぞれ 3 年生の保護者全員を対象に、学校で進路説明会を行う時に、外国人のニーズが多いところでは別室に外国人専用の説明会を設けて、そこでブラジル人にはポルトガル語の通訳さんに来てもらって説明をしてもらいます。私の学校では今年ポルトガル語で行いました、資料もポルトガル語で書かれています。市の方でも夏休みに外国人保護者向けのポルトガル語での説明会を開いています。それからその日に行けない人のためにも、市の方では適宜言語ごと、月曜日はたとえばポルトガル語、火曜日はタガログ語とかいうふうに相談コーナーを設けています。

池上

最後にちょっとまとめをしたいと思います。今日は三者三様の立場で日本の学校文化とブラジルの学校文化について比較の視点を持ってお話をいただきました。全貌を把握するということはもちろんできないんですけど、どうして外国の子たちはこういうことをするのかなど不思議に思うことの背景の一部がお分かりいただけたのではないのかと思います。私自身もブラジル本国の学校を何度か見学する機会があったのですが、なるほどこうなんだと納得するところがありました。日本の基準だけで見ているとおかしいとか、どうしてできないのかと思いますが、相手が当たり前だと思っていることを知ること、その背景が理解できました。今日の会がそのような機会になったのであればとても嬉しいことです。

一方で保護者の立場でお話いただいたお二人からは、やはり子どもたちに対する強い愛を感じました。子どもが人生を切り開く上で教育は非常に大切なんだという思いを、私たちは改めて感じたわけであります。子どもさんがブラジルの大学に進んだ安藤クリスチーナさんの話からは、ブラジル人としての誇りを持ってほしいというすごく強い思いを感じました。いったんブラジルに子どもと一緒に帰ったけど、日本に戻ってきてここで生きていくぞと決めたタミさんからは、やはり子どもたちに日本で生きる力を身につけてほしい、そのためにはやはり日本の場合は高校、大学と進学することが大事なんだという強い思いを今日感じました。はじめて琢問くん自身がその話を聞いたという、とても貴重な機会となりました。

今日の話の中で、じゃあ他の国、特に最近増えているフィリピンの場合はどうなんだろうなという疑問を私も持ちました。皆さんもきっと持たれたと思います。また機会を作って最近増えているフィリピンの子たち、あるいはその保護者がどんな背景を「当たり前」にして学校文化を見ているのかを考えていきたいなと思っております。

今日はここにポルトガル語がわかる人が私が知る範囲でちょうど 10 人いました。学生たちも琢問くんを含めて 4 人いました。そういう時代になってきたなと思いました。

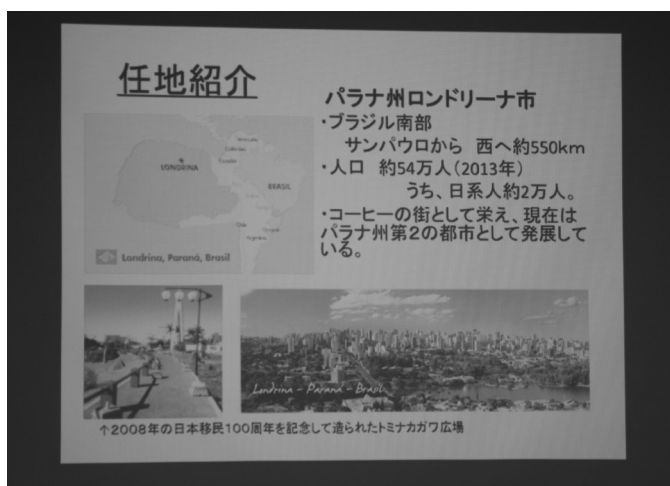
このフォーラムの次の機会がいつなのかまだ決まっていませんけれども、年度内にもう一回開催できればと思っています。こんなフォーラムだったらいいなという意向があれば、このアンケート用紙に書いていただきたいと思います。それでは本日は土曜日でお休みのところにお越しいただいて、お時間をとっていただいたパネリストの方々、坂柳先生、安藤クリスチーナさん、カルドーズ・タミさん、そして優秀な通訳を務めてくれた田中琢問くんの 4 名に大きな拍手をお願いします。ありがとうございました。



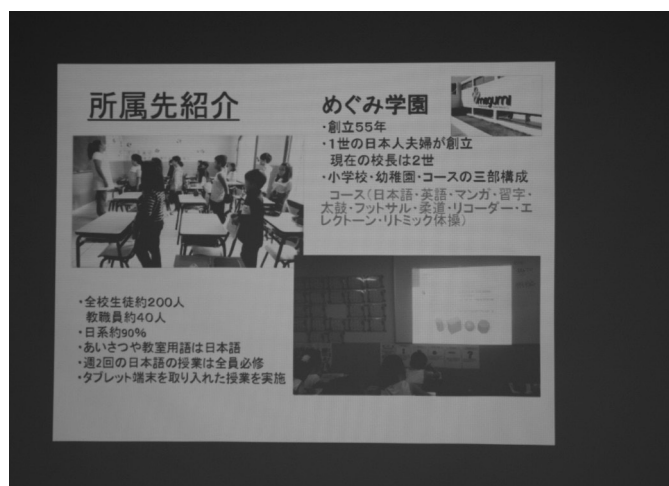
池上教授による趣旨説明



報告1:坂柳言依氏



報告1:坂柳言依氏



報告1:坂柳言依氏



報告1:坂柳言依氏



報告1:坂柳言依氏



会場の様子



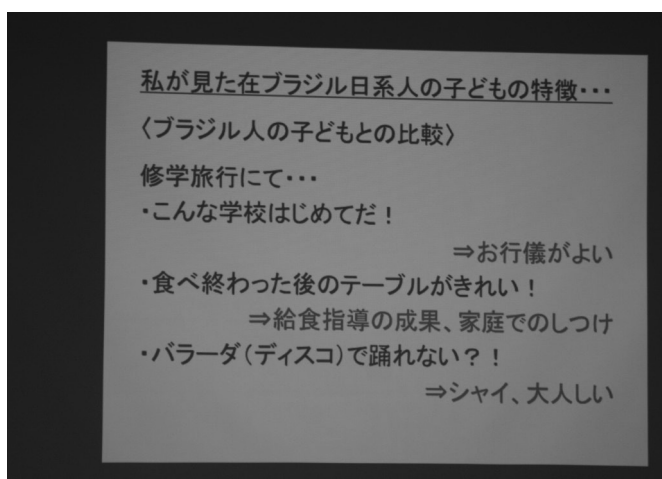
会場の様子



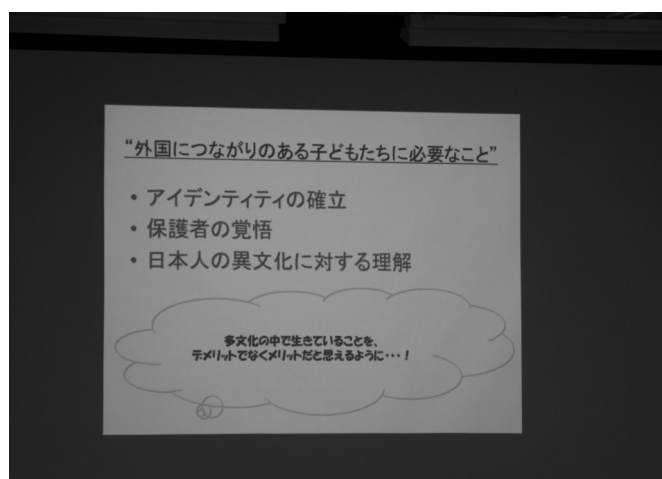
報告1:坂柳言依氏



報告1:坂柳言依氏



報告1:坂柳言依氏



報告1:坂柳言依氏



報告2: 安藤クリスチーナ氏



報告2: 安藤クリスチーナ氏



報告3: カルドーゾ カロル 多美氏



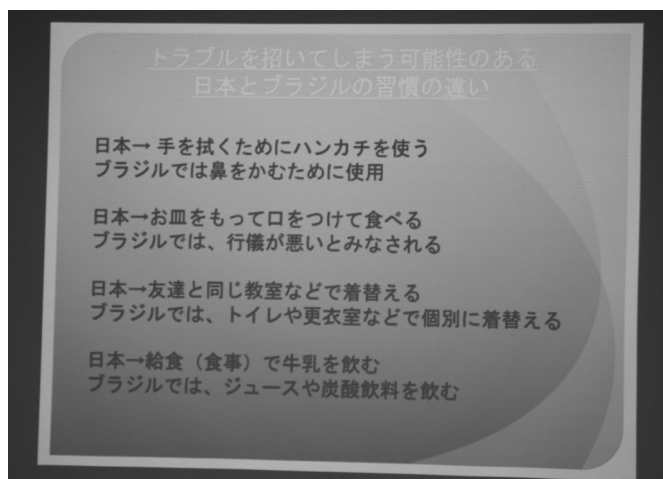
報告3: カルドーゾ カロル 多美氏

日本とブラジルの教育システムの違い		
国	内容	ブラジル
学期		1月～12月
教育システム		小学校6年 中学校3年間 高等学校3年間 大学4年間
入学式		なし
一日の期間		平日 午前中 8:00～12:00 午後 13:00～17:00
給食		なし
家庭訪問		なし
三者面談		なし
運動会		なし
清掃奉仕		なし
プールの授業		なし
家庭科		なし
学内の清掃		清掃員の仕事
避難訓練		なし
修学旅行		なし
健康診断		なし
英語の授業		幼稚園から（スペイン語の授業も実施）
問題を起こした生徒への注意		一回目：学校から注意 2回目：親と面談 3回目：退学処分
卒業式		あり

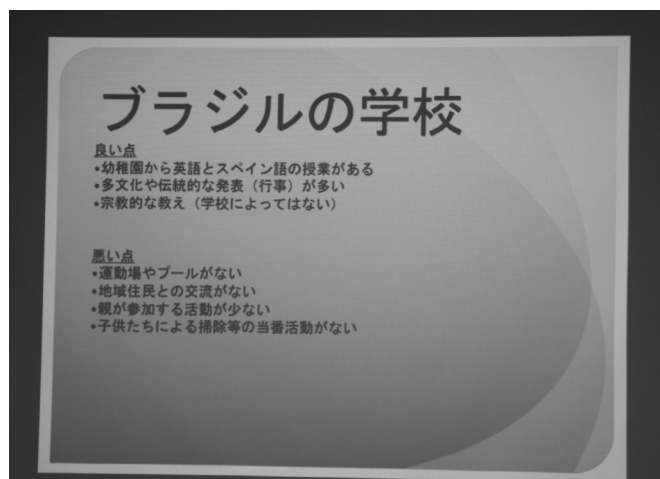
報告3: カルドーゾ カロル 多美氏



報告3: カルドーゾ カロル 多美氏



報告3:カルドーゾ カロル 多美氏



報告3:カルドーゾ カロル 多美氏



グループディスカッション



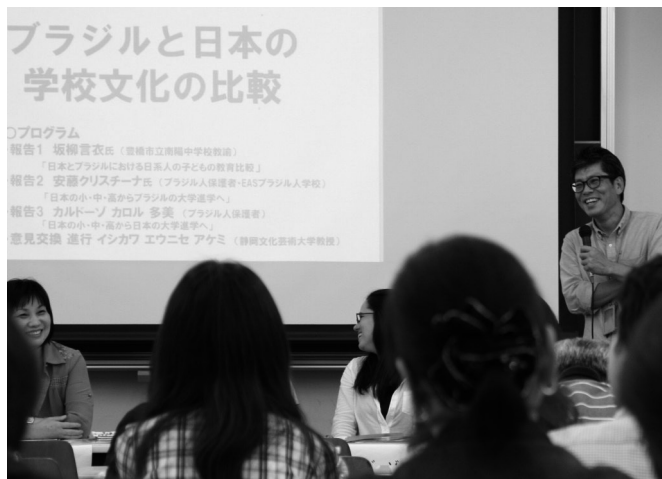
グループディスカッション



グループディスカッション



グループディスカッション



質疑応答



質疑応答



質疑応答



質疑応答



質疑応答



質疑応答

第10回多文化子ども教育フォーラムアンケート単純集計

性別

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	男	14	34.1	34.1	34.1
	女	27	65.9	65.9	100.0
	合計	41	100.0	100.0	

性別では女性が66%とほぼ3分の2を占めた。

年齢

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	10代	14	34.1	34.1	34.1
	20代	6	14.6	14.6	48.8
	30代	6	14.6	14.6	63.4
	40代	7	17.1	17.1	80.5
	50代	4	9.8	9.8	90.2
	60代	4	9.8	9.8	100.0
	合計	41	100.0	100.0	

年齢層でみると、今回は10代が34%と3分の1を占めている点が特徴的である。じつは池上が担当している「多文化共生論」の講義で今回のフォーラムのことを紹介し、出席して小レポートを提出した学生には加点する旨を事前に告知したこともあり、多文化共生関係の活動（外国人中学生への学習支援活動等）に関わっている学生を中心に10代の参加者が多くなった。10代、20代でほぼ半数となっており、多文化共生関係のフォーラムにしては珍しく若者が多い会になった。

出身

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	浜松市内	23	56.1	56.1	56.1
	静岡県内	14	34.1	34.1	90.2
	県外	4	9.8	9.8	100.0
	合計	41	100.0	100.0	

浜松市内からの参加が56%を占め、静岡県内まで広げると90%になる。今回は静岡県内の参加者が多かった。

所属

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	学校教員	4	9.8	9.8	9.8
	支援員	3	7.3	7.3	17.1
	ボランティア	6	14.6	14.6	31.7
	研究者	1	2.4	2.4	34.1
	行政関係者	3	7.3	7.3	41.5
	学生	17	41.5	41.5	82.9
	その他	6	14.6	14.6	97.6
	無回答	1	2.4	2.4	100.0
	合計	41	100.0	100.0	

回答者のなかでは学生が42%を占めた。その背景は上述の通りである。次にボランティアとの回答が多かった。学校教員や支援員の参加もあり、それぞれの方の日々の教育実践に引きつけてフォーラムでの話を聞いてくれたことと思う。

国籍

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	日本	37	90.2	90.2	90.2
	ブラジル	3	7.3	7.3	97.6
	中国	1	2.4	2.4	100.0
	合計	41	100.0	100.0	

国籍では日本が90%を占めたが、ブラジル、中国との回答もあった。

参加回数

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	はじめて参加した	26	63.4	63.4	63.4
	これまで1～2回参加した	5	12.2	12.2	75.6
	これまで3～4回参加した	6	14.6	14.6	90.2
	これまで5回以上参加した	4	9.8	9.8	100.0
	合計	41	100.0	100.0	

参加回数について尋ねたところ、「はじめて参加した」との回答が63%でほぼ3分の2を占めた。これは上述のとおり、本学学生ではじめて参加した学生が多かったためであろう。一方、今回10回目を迎えた多文化子ども教育フォーラムに5回以上参加したという方も1割ほどいた。継続的な参加者が足を運んでくれるような魅力あるテーマ設定が今度も求められよう。

告知

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	FICEのML	4	9.8	9.8	9.8
	その他ML	7	17.1	17.1	26.8
	文芸大HP	2	4.9	4.9	31.7
	チラシを見た	9	22.0	22.0	53.7
	その他（授業）	12	29.3	29.3	82.9
	その他（Facebook）	4	9.8	9.8	92.7
	その他（知人）	2	4.9	4.9	97.6
	無回答	1	2.4	2.4	100.0
	合計	41	100.0	100.0	

どうやって今回のフォーラムを知ったかについて尋ねたところ、その他（授業）がもっとも多かった。これは本学の「多文化共生論」の受講生だろう。次いで、その他MLが2割近い。子どもメール等での告知が有効に働いているものと思われる。多文化子ども教育フォーラムは費用をかけてチラシを作ることはせず、基本的にはWEB媒体だけで開催告知を行っているので、WEB上での効果的な情報拡散方法について今後も策を練っていきたい。

アンケートの自由記述から参加者の声

- 小学校で外国人支援の仕事をしていますが、カルドーズ多美さんのお話がとても参考になりました。家庭での日本語学習のとりくみ（親子での書き取りや家具にカードをはるなど）を、ぜひ、多くの外国人保護者の方に知っていただき、子供さんと一緒に実践していただければと想いました。
- クリスティーナさんの子育てに感動しました。自分のことより、いかに子供にいい経験をさせてあげるかを第1に考えて、ブラジルの大学へ行かせた気持ち、いろんな日本人お母さんにも聞いてほしいお話でした。（エゴ的ならば、自分のそばに置きたいと思います。）子どもを思う、正しい方向の気持ちを日本人は忘れていく人が多いように思うから。この多文化共生の時代、いろいろな切り口で、母国語を大切にすることを伝える機会ができそうだと想いました。日系ブラジル人にも日本人にも今こそ考えてほしい母国語と教育です。
- 大変参考になった。感動しました。「教育」は大変重要だと改めて感じさせられた。Muito Obrigado!
- 全ての話が、私の日常にあることで共感できさまざまなケースを知ることができ勉強になりました。
- とても良いお話を聴くことができ大変満足できました。次回も是非参加させて頂きたいと思いました。

- 保護者の立場からも意見を聞くことができ、いつもとは違う視点で話を味わうことができました。
- 将来的には教育になりたいと思っています。現役教師の方や進路・生活指導を行う上で重要な保護者の話を聞くことができ本当に良かったです。将来外国人の生徒を持った時に備えて、とても役立つと思います。ありがとうございました。
- たくもんの通訳が素晴らしかったです。
- 普段大学で講義を通して学んでいるテーマを、実際に外国とつながる子どもたちと関わっている先生、保護者の視点から、日本の教育制度、事情、ブラジルの学校のことを知ることができて大変貴重な経験でした。人にはそれぞれ違う背景があるので、外国人とひとくくりにせず、出身国や文化を大事にしていかなければいけないと思いました。
- 本日はありがとうございました！初めて参加し、多文化共生の重要性を感じました。日本社会が得意とする地域社会との関わり、あるべき姿など、より一般市民に考える機会を持たせるフォーラムが開催されるとよいと思いました。
- 多文化を理解し、しっかりとした学習等が伝わり感動しました。ありがとうございます。
- 支援現場での異文化国の子供達への接し方を注意しなければと再認識した。個人差への対応。
- 私たちにできることがたくさんあって、それが大きな力になるんだということが分かりました。
- 大変良かったです。日本生まれの私は8才の時にブラジルに渡り、言葉がまったくわからないまま、小学校に入りました。幸い近所の友だちが日系でかたことの日本語が話せたので通訳をしてくれました。やはり言葉の壁は大きかったと思います。カルチャーショックもありました。幸い8才という順応しやすい年齢でしたので、すぐに学校になじむことができ、言葉も早くおぼえ、当時は日本人で大学に進む人は少なかったのですが、家族の理解を得て大学を卒業することができました。そのおかげで現在の私があるとおもい心から感謝しています。
- 教諭自身が多文化に触れる機会を持ち、いつでも気軽に相談できる窓口を持つことが必要だと思った。
- 保護者の方のお話をきけて、色々今後の対策を考えるヒントになりました。
- 高校、大学進学に至るまでには家庭での方針がしっかりしていることが重要だと改めて分かりました。外国人の親同士でよい情報がもっと共有されることを期待しています。

- 今日のお二人の保護者（母親）のお話はとても貴重なものでした。分かったことは家庭教育の大切さ、家庭の愛の大切さです。ありがとうございました。
- 池上先生の授業だけでは分からない、実際の方々、御三方のお話を聞けたのは、とても有意義で授業にも役立つものだと思います。
- ブラジルの日系の人達が通う日本語学校、日本の学校に通う外国につながる児童・生徒の両方の話を聞けて、両方のよさ、問題点、難しさを知れて良かったです。教育はその後の人生を左右すると思うので、文化や言語の違いによって学校が嫌いになったり心を閉ざしてしまうようなことがあると知って、このようなことが少しでも減るといいと思うとともに、教員の側の対処や実体験も聞きたいと思いました。
- 色々な立場の方がいてとても楽しかったです。
- 今回このフォーラムに参加して本当によかったと思います。やはり多文化を理解することは、どこの国でも共通の課題だと思います。
- 外国人の方にリアルな話をきくことで、新しく学べたことがたくさんありました。またこのような機会があれば参加したいです。ありがとうございました。
- 子供の教育についての悩み、日本人に必要な事等、少し分かった気がしました。ありがとうございました。
- 多文化を理解するというスケールの大きなことを身近に感じるとともに自分にも何かできることがあると気づくことができました。
- ブラジルの学校や子どもたちの実際の例を聞けて、子どもたちの背景についての理解が深まりました。親の姿勢がとても大事だということも再認識しました。ありがとうございました。
- 日本の学校とブラジルの学校にプールや給食など、こんなに差があることを知りました。よくいっしょにいる人にはブラジル人が多いですが、牛乳を飲んでいるところを見たことがないです。また、ハンカチで鼻をかむという場面を見ました。今までのその友達の行動の理由が今回のフォーラムでわかって良かったです。



第10回 多文化子ども教育フォーラム (Forum on Intercultural Children's Education)

ブラジルと日本の 学校文化の比較

○プログラム

- ・報告1 坂柳言衣氏（豊橋市立南陽中学校教諭）
「日本とブラジルにおける日系人の子どもの教育比較」
- ・報告2 安藤クリスチーナ氏（ブラジル人保護者・EASブラジル人学校）
「日本の小・中・高からブラジルの大学進学へ」
- ・報告3 カルドーゾ カロル 多美（ブラジル人保護者）
「日本の小・中・高から日本の大学進学へ」
- ・意見交換 進行 イシカワ エウニセ アケミ（静岡文化芸術大学教授）

○対象

外国につながる子どもの教育や関連する課題に関心のある方

2015.7.4（土）
13:30～16:30

静岡文化芸術大学

南棟2階 南280中講義室
浜松市中区中央2-1-1

主催：静岡文化芸術大学

問い合わせ先：上田ナンシー直美

TEL：053-457-6105

E-mail：fice2012@gmail.com

坂柳さんは豊橋市の小学校に6年間勤務した後、JICA日系社会ボランティアとしてブラジルの小学校に派遣されました。派遣前も派遣後も、国際学級の担当をしています。

安藤さんの二人の子どもは来日後、日本の小学校に編入しました。日本の中学校と高校を卒業した後にブラジルに帰国、現地の大学に進学し卒業しました。

カルドーゾさんの長男は日本とブラジルの学校を経験し、現在は日本の大学に通っています。

多文化子ども教育フォーラム 検索

参加無料
申込不要

このフォーラムは2015年度 静岡文化芸術大学 特別研究(研究代表:池上重弘)
「多文化共生の地域課題への取り組みをめぐる総括的研究」による事業の一環です。

第10回多文化子ども教育フォーラム
ブラジルと日本の学校文化の比較
報告書

2016 年 3 月 印刷発行

編集

池上重弘、イシカワ エウニセ アケミ、上田ナンシー直美

発行 静岡文化芸術大学

430-8533 浜松市中区中央 2 丁目 1-1

TEL (053) 457-6156

FAX (053) 457-6156

Email: ikegami@suac.ac.jp

印刷 オオゼキ写真印刷株式会社

433-8111 浜松市中区葵西 2 丁目 5-20

TEL (053) 436-1956

FAX (053) 437-6095
